feel little soul(僅かに感じる気持ち)

しの山　あや子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｆｅｅｌ　ｌｉｔｔｌｅ　ｓｏｕｌ（僅かに感じる気持ち）

【Ｎコード】

Ｎ９０８７Ｘ

【作者名】

しの山　あや子

【あらすじ】

山に囲まれた小さな村に暮らす主人公・湊（みなと）と双子の小泉兄弟の三角関係の恋愛短編小説。幼馴染であるが故、なかなか恋愛に発展しない三人の恋模様を描きました。

（前書き）

前篇です。後編のタイトルは、ｍｙ　ｌｉｔｔｌｅ　Ｓｅｏｕｌ（私の小さな気持）です。

＊　＊　＊　＊

――――私の心の中には、彼が一番輝いて見えるのです

＊　＊　＊　＊

教室の中、生徒達の賑やかな話声がする。
長い授業も終わり、今は下校時間――――

「湊(みなと)～、帰るぞ～」

私は、その明るくさわやかな声に呼ばれて振り向く――――そこには、やけに顔の作りが良い男が立っていた。
そのすぐ後ろには、その男と瓜二つの顔がもう一つ。

話しかけてきた方は小泉　修(しゅう)
クラスの女子半分から告白されたという伝説を持つ男で、私の幼(おさ)馴染(なじみ)。

ここは、山に囲まれた田舎の小さな村――――私達三人はそんな自然豊かな環境で、日々特に何事も無く毎日を共に過ごしている。まあ、家が隣同士だから、高校生になっても仲良く一緒に帰ってるだけなんだけど…

修はいつもハイテンション、帰り道の会話は修の止まらない学校なんかの話ですごく賑やかだし、楽しい。

対してその双子の弟・小泉　太郎(たろう)は、同じ顔でも全部の筋肉が緩んでるのか、やる気のない表情、猫背でぼさぼさの短い黒髪が、整った顔を台無しにしていた。おまけに無口なせいでクラスの人気は修ばかりだ。本人は気にしてもいないけど…

「なあ、腹へらね？」

「んー」

右を向くと修がこっちを覗いている。白い歯を覗かせ、ニシシと笑う美少年は、いつにも増して輝いていた。

「なあ、いつものマップ行こーぜっ」

（またですか～好きだな修は～）

今週に入って何回目か分からない言葉に呆れる私、思わず苦笑いがこぼれた。

「……ふとるぞ」

（……え……）

左から聞こえた小さな低音が私の耳に入ったので振り向くと、太郎は何事も無かったかのようにボーっと地面を見て歩いている。

「ああ　ゞ！？」

修は兄を睨みつけるが、太郎はあらぬ方向を向いている。

「…私、見たいドラマあるから…」

「何！？なんだよ～じゃあもう良いよ～……」

（そんな落ち込まれたって…正直な気持ちだしな…）

言いたいことは言う、感じたことはすぐ口に出す。

誰が言ったわけではないけど、私達の間でいつの間にか出来た暗黙のルールの様に思う。

春の暖かな季節――私達はいつもと変わらない道を、いつもと変わらない三人で歩く。

ふと、私は太郎の方を見上げる。

「……っ」

――――ドクン

私の胸の鼓動が響いたのが分かった。

太郎は優しく私にほほ笑んでいたのだ。

普段、顔の筋肉をすべて緩めて実に締りのない顔のくせにこれは不意打ちだ。

びっくりして、額に変な汗がでる。

（太郎は、時々こんな顔をするんだから…）

「じゃあな、湊っ」

「ん、じゃあね」

私は玄関の前で、二人に見送られもうすぐ始まるドラマに胸弾ませて入って行った。

＊　＊　＊　＊

修は湊が入って行った玄関を見つめていた。太郎はそんな修を見つめる。

「…おい」

太郎がひょっこりと背後から顔を出し、弟に呼び掛ける。
修の視線はどこを見るでもなく、何か物思いにふけっているようだ。
僅かに顔を傾け、太郎の方をチラリと見て、すぐに背けた。

「なあ、湊って…かわいいよな」

「…はあ」

太郎は極めてテンションが低い、どちらとも付かない反応で分からない。

「ちぇ…お前はいつもそうなんだ…まあ、いいや」

そんな太郎に修は苛立ったように舌打ちをして、さっさと自分の玄関へ入って行った。

「……ふん」

太郎は、一人置いて行かれポツンと立っていたのであった。

――――次の日

「せーーのっ！！修――――――！！」

体育の時間、バスケの授業で男子達が試合をしていた。
体育館にはシューズの擦れるキュッキュという音や掛け声が響き、上の階から試合を見学する女子たち黄色い声援が特定の人物にかけられていた。
よもや他の男子達はすでに殺気立った視線を修に送っているが、修は純粋に試合を楽しんで笑っていいた。

（修って、どうしてあんなにモテるんだろ？太郎は…あ、いた。なんだ…まだ出番じゃないのか…隅っこで他の男子と談笑してる……）

修は体育や音楽、美術の成績がかなり良い。太郎は、それを補うかのように勉強全般がクラスでトップを誇っていた。

（お馬鹿でお調子者の修にやる気のないくせに勉強ができちゃう太郎。ほんと、二人合わせて一人前か…）

「よーう、モテますな」

話しかけてきたのは私の友達、あだ名はみーちん。

「あんたってさ、ほんとに修君の事なんとも思わないの？あんだけカッコイイのに…」

（…もしかしてみーちんも、修の事好きなのかな？）

みーちんは高校に入ってから知り合った友達で、一緒に居て落ち着くし凄く姉御肌で何かと私に助言じみた事を言ってくれる。
美人さんだから、男子達の間でひそかに隠し撮りが出回ったけど、みーちんにばれて男子達を全員根性入れのビンタしたっていう伝説を持ってます。

「大丈夫だよみーちん、私は修とはただの幼馴染だからっ」

舌を出し茶目っ気を出す私。みーちんは短くため息を吐くと、呆れた顔で私を見る。

「ばかね、湊の心配をしてるのよ」

「へ？」

「いつまでもそんな男に無関心だったら、このままずっと彼氏なんて出来ないわよ…？」

「ふははっ」
みーちんは極めて冷静に言い放つ。

「みーちんは美人でモテるからなあ…」

「んなこたないわっ」

鋭く突っ込むみーちんは怒っても綺麗で、なんだか私には眩しくて、ちょっと切ない気持になる。

「うーん、私には…まだよく分かんないな。恋とか…そーゆうものは——

想像つかないくて……程遠いよ――」

「…恋愛すると、人って何倍も成長するもんよ。湊の成長は止まってる。いい？人間の生態系を否定すんじゃないよ、その世界に生きる奴らはみんな子孫残して生き残ってんの。あんたの本能がそんなの許さないし、体は反応してるはずよ」

「みーちん…年頃の女の子がはしたないわよ」

「いいの！！聞きなさい、だからさあっ鈍チンの湊が少しの変化を気付かないといけないのよっいつまでもガキみたいな幼稚なこと言ってないで、アンテナ張りなさい」

「…はい」

言ってることはめちゃくちゃなようだけど…その勢いに負けて私は何故かペコリと頭を下げてしまった。

私の返事を聞くと彼女はフンと鼻を鳴らし、前かがみの姿勢を直した。

（あれ…太郎だ、どこ行くんだろ）

さっきまで雑談していた太郎がふらりと体育館の外につながるドアから出て行く姿を見た。

周りを挙動不審に見回ると、ドアの外へ、すばやく姿を消す太郎。

（あやしい……）

私は面白そうなので、太郎のあとを付いて行くことにする。

「太郎？」

私は顔だけ外に出して覗いてみる。太郎はすぐ横の数段ある階段で座り込んでいた。

「おお」

「何してんの？」

いつもの無表情な太郎の隣に私も腰を下ろした。

「何って、決まってんだろサボリだ。苦手なんだよ団体でやるスポーツ」

「…ふーーん」

太郎は青ざめた顔で遠くを見つめた。何かトラウマでもあるんだろうか……太郎があまりにも嫌がっているようなので、思わず苦笑いを浮かべてしまった。

――――――バタバタバタ

足音が慌ただしげに近づいてくる。すぐに足音の主はさっきの私と同じように顔だけ外に出して覗いてきた。太郎と同じ顔だ。

「お、湊っ！！太郎知らねえ？」

（ああ、太郎なら後ろに…っていない！！）

振り返ると、太郎は忽然と姿を消していた。これは…たぶん逃げ

たのだろう…はあ

「湊？」

「え…えーと」

修はにっこりと私に向かって笑いかける。私も笑顔を張り付けて笑ってみせた。

「シラナイヨ」

「…？…ははっ」

「えへへ…」

言葉はかたことだけど…修はなんだか嬉しそうに笑うだけだった。

そんな修にほっと胸をなでおろす。

「おい、修。奴は見つかったか？」

「あーいいや！！」

クラスの男子達がやって来た。なんかすごく困っってるみたいで、頭を掻いている。

「しょーがねえ、お前続けて出ろよ」

――――ガシ！！

男子達は何人かで力強く修を掴む。修は顔が引きつって変な汗を

流していた。
「は！？」
「顔は同じじゃん」
「嫌だっ」
「ま～～ま～～」
「……！！」
修は容赦なく引きずられていく――
「ジョーダンじゃねえぞ！！！！」
――――ピ――――！！
「試合始めるぞーー」
先生の声が聞こえ、修の断末魔は儚く消えて行った。
私は両親がチクチクと痛む胸を抑え、とても修の試合を直視する事が出来なかった……
――ポン
「ふうーーー」
どこから出てきたのか…太郎は私の好きないちごミルクを両手に持ち、片方を私の頭の上に乗せてドカっと横に座ってため息をつい

た。

「……」

太郎も私も、少しの間静かになる。

「ぷっ――はっはっはっ！！さんきゅ、湊！！」

吹きだした太郎が、私に満面の笑みを浮かべて笑ってきた。

（太郎…すっごい爆笑してる……）

――――キュン

（……ん？）

――――キュウン

（あ、いたた…）

――――ドッキューーン！！！！

（ああ、やっぱり勘違いじゃないっなんか私…胸がドキドキしちゃってる！？なんで…）

「あ～あ、面白かったぜーい…あの修があんなにテンパってんだもんな…ぶくく」

太郎は生き生きとした顔で両手で口を抑え、必死に笑いを堪えている。

（うーん、この笑顔自体はすっごく腹黒いのに…私ったら不覚にもドキッとしてしまうなんて…）

この気持ちはなんだろうと、私には理解できない感情だ。

「あ、そうか」

「え？何だよ湊」

――――ドクン！！

（ぁ…また…）

そうだ、太郎が私の事湊って呼ぶの…小さい頃以来なんだった…

「……」

それに気が付いた私は恥ずかしさで、顔をあげられなかった。

「……」

太郎は、そんな私に温かな視線を一瞬向け、私の上がった熱が写ったかのように――

頬を赤く染めた……

私達は無言で、お互いの顔を見ず、なんだか変な空気が流れていた――――

＊　＊　＊　＊

その日の放課後――――

「うふふふ……」

「な、なにさっ……みーちんってば、にやにやして」

みーちんは、両肘を机にちょこんと乗せ、笑顔で湊に顔を近づけていた。みーちんが笑っている原因は、私の手にしている手鏡だ。

「湊が、鏡を見てるっ！！」

「～～～～っ」

（みーちん、何か感ずいてるっ？分かっちゃうかな……私が、もうすぐ来るあの人に、胸を高まらせてること……）

「み～なと、帰ろうぜっ」

「ひゃっ……！！」

背後から元気よく声をかけられ、思わずがばっと体を半回転させ立ち上がる。ドッドと心臓の音が聞こえる。私は、声を掛けてくれた修の後ろをのぞくように、かかとを上げた。

「……？」

見ると、そこに太郎の姿はない。

「あ…れ…？太郎は？」

「……」

ピクリと、修の眉が動いたのに、湊は気付かない。一呼吸置いて、修は口を開いた。

「知らない女と…帰った」

＊　＊　　＊　＊

（――なんで……）

私の頭の中では、もうわけが分からなくなっていた。心と体が、思ったように動かない。時間が、止まってしまったように、いや、むしろ考えること自体を、拒否するかのようだった。

「おい、湊」

学校の帰り道の河川敷を、修と二人で歩いていた時、修が耳元で囁いた。

「……っな、なにするの！！」

ぶるぶると、体が震え、少し変な気分になる。不意を突かれ、明らかに動揺する湊。

「ふ。そっちこそ、無視すんなよ。人が話してるときに」

「あ…ごごごめんっ」

「ったく…それで、今日の体育の時間、俺が休みなしに試合で苦しんでる最中、湊…太郎と一緒にいたって本当…？」

「…う。それ、誰から聞いたの…」

「体育館裏で、二人で仲良くジュース飲んでたの見たって女子達が騒いでマシタ」

（ひえ～言い逃れも、できそうにないな…）

「…うう。ごめんなさい」

「ひでえよなっ湊は～～」

修はほほを膨らませ、私の頭をコツンと叩いた。

「……なあ、湊。その、な、……なんかさ、太郎と仲いいの？」

「そんな事ないよ。修と同じくらいだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9087x/

feel little soul(僅かに感じる気持ち)

2011年10月25日03時06分発行